

# tokyo tower(東京タワー)

2004(平成16)年11月19日鑑賞〈東宝試写室〉



監督・脚本=源孝志/出演=黒木瞳/岡田准一/松本潤/寺島しのぶ/宮迫博之/平山あや  
/加藤ローサ/余貴美子/岸谷五朗 (東宝配給/2004年日本映画/126分)

……21歳の魅力的な大学生と41歳の美しい人妻との恋。そしてこれを際立たせるような、もう1組の同じようなパターンの不倫……。黒木瞳はそんなテーマにピッタリの美しさで文句なしだが、ストーリー展開を観ていると若いヤツらの軟弱さ(?)に腹が立ってくる。またいろいろとつめ込み過ぎのストーリーで、私にはあまり説得力ありとは思えないが……。

## 透と詩史

この不倫ドラマの主人公は、21歳の大学生小島<sup>とおる</sup>透(岡田准一)と41歳の人妻・浅野<sup>しふみ</sup>詩史(黒木瞳)。透は詩史の友人・小島陽子(余貴美子)の一人息子だ。詩史の夫・浅野(岸谷五朗)は売れっ子のCMプランナーで収入も十分。だから詩史も青山の一等地にセレクト・ショップを持ち、高級マンション暮らし。こんな詩史と透は、東京タワーを見渡せるマンションの一室で愛し合っていた……。

## 耕二と喜美子

大原耕二(松本潤)は透の親友で同級生。耕二は年上の女が好き。なぜなら年上の女はセックスが良くてお金持ちだから……? しかし、高校時代に同級生の吉田(平山あや)の母親に手を出したのが娘にバレて大騒動。そんなトラウマを抱えながらも、今はまた家庭に不満一杯の主婦・川野喜美子(寺島しのぶ)といい仲に。魅力的な若い男なら、欲求不満の人妻を落とすくらい簡単……?

## 原作は?

この映画の原作は直木賞作家である江國香織の『東京タワー』。年上の美しい人妻と若い大学生とのオシャレな(?)恋愛模様が、東京タワーの見える高級マンションを舞台に展開される。私は原作を読んでいないが、セリフやナレーションの多くは原作に近いものと思われる。また、東京タワー、高級マンション、高級ホテル、高級パーティーの映像も、原作のイメージを忠実に表現したものと思われる。だから(?)、私はどうもこの映画を好きになれない……。

冒頭「2人は空気で惹かれあった恋人同士」という説明からして、ちょっとわざとらしいし、「恋はするものじゃなくて、落ちるものだ」という決めセリフ(?)もひどくキザ。田舎者の私には、こんな洗練されたセリフはどうも……?

### 詩史の夫は利口なのか、バカなのか?

詩史の夫が最初にスクリーンに登場するのは、華やかなパーティー会場。もちろん夫人同伴で、英語が飛び交うオシャレな高級パーティーだから、こんな時は美しくて知的な妻詩史は重宝なもの。2人の夫婦仲が実際どの程度壊れているかは映画からはよくわからない。しかし「仮面夫婦」を装っているだけでないことは、不倫がバレた後の浅野の行動を見れば明らか。しかし、それにしても詩史の不倫を知った後の浅野の行動は私には不可解! 決してバカではないはずだが、あまり利口ともいえないのでは……?

### 耕二の軟弱さ(?)にイライラ……?

私に言わせれば、耕二は高校卒業後、アルバイトをしながら適当に女遊びを楽しんでいるだけのバカ。高校生の時、同級生の女の子の母親に手を出して散々な目に遭いながら、今日は再び欲求不満の主婦、喜美子と……? 駐車場で苦戦していた喜美子に代わって車を駐車してやった時から、明らかに不倫の匂いが……。

夫と姑に不満をもち、欲求不満の人妻喜美子の役を、『赤目四十八瀧心中未遂』(03年)で日本アカデミー賞最優秀主演女優賞等に輝いた寺島しのぶが熱演。特に後半、若い耕二との肉体関係におぼれていく姿は恐ろしいほどリアル。これに比べれば、若い耕二のちょっとした「お遊び」などホントにバカみたいなもの……? 恋人の由利(加藤ローサ)や、母親を耕二に奪われて錯乱気味(?)の

同級生の吉田らが集まっているところに乗り込んできた喜美子が耕二に突っかっていくシーンなどは実に圧巻！ こんな修羅場を乗り切れるほどの才覚がまだ耕二にないのは当然。35歳の人妻に手を出すのはまだ10年早い！

## 不倫がバレた後の行動その1——詩史の場合

今41歳の詩史が今21歳の透と「そういう関係」になったのは3年前のこと。年明けのカウントダウンをパーティー会場で楽しんだ41歳と21歳の2人だったが、新しい年の夏には耕二と喜美子の関係と同じく最悪の事態に。つまり、不倫が夫にもバレ、透の母親にもバレてしまったわけだ。透と2人でゆったりとした時間を楽しんでいた別荘に乗り込んできた詩史の夫は、その場で追及しなかったものの、以前から妻の不倫に気づいていたことは明白。他方、一人息子が自分の親友と不倫関係にあることを知った母親の小島陽子は、露骨に詩史に対して罵声を……。これによって詩史の不倫は公になってしまったから、さあ詩史は……？

## 不倫がバレた後の行動その2——透の場合

不倫がバレた後、透は詩史の夫からプールの飛びこみ台に呼び出された。それもきわめて冷静に……。こんな場面で浅野が言う「お前は所詮、高級なおもちゃなんだ」という「主張」に透は何も反論できないはず。ところが意外にも透は、「詩史さんと離婚して下さい」と都合のいい要求を……。そりゃないだろうと思うのだが、多分原作もこんなストーリーなのだろう……。その結果、透は意外にケンカが強い浅野によってボコボコに殴られた挙げ句、飛び込み台からプールに突き落とされてしまった。これでジ・エンド……。と思ったら、何と透は、血を流しずぶ濡れのまま浅野や詩史のいるパーティー会場へ。そして詩史の膝元にすがりつき、「僕はおもちゃじゃないですよ」と同意を求める始末。それに対する詩史の答えは、「お帰りなさい。私は壊れたおもちゃはいらないの！」というはっきりしたもの。そこで私は十分「納得」したのだが……？

## 納得いかない展開その1——透のフランス留学

この映画にはどうも私が納得いかない展開が多いので、以下順次それを4題。

以前は一緒に見ていた東京タワーを、不倫がバレた今は全く別の場所から見なければならなくなった透は絶望のあまり遂に……という場面でスクリーンは途切れてしまい、その後の事態は「観客の想像におまかせ」ということになった。ところが、物語は私の想像とは違う意外な展開に……。なぜかは知らないが、透の母親と詩史の夫がビールを立ち飲みしながら話していることによれば、何と透はフランスに留学したとのことだ。あの時の、あのセリフでは、透は詩史との思い出のペンダントを抱え、東京タワーを見ながら飛び降り自殺したのでは！それが当然の想像のはず！ところがそれが、「詩史さんを忘れるために1人パリに旅立ったのです」というストーリー展開はないだろうと思うのだが……？

## 納得いかない展開その2——詩史の離婚

前述の透の母親と詩史の夫との会話によれば、詩史は夫に対して何も求めないまま離婚届にハンを押してくださいと言ってきたとのこと。若い大学生との不倫を後悔したうで、あれだけのリッチな生活をすべて捨て、41歳の女がこれから1人生きていこうと決心したのであれば、それはたしかに一大決心であることはまちがいない。しかし、いくら美人でいくら知的でも、41歳の女がこれから1人で生きていくことは難しいのが社会の現実。さて彼女は、離婚後の人生設計をどうたてたのだろうか……？

## 納得いかない展開その3——耕二と喜美子との清算

耕二と喜美子との関係の清算も私にはどうも納得できないもの。耕二の彼女たち(?)がいる前で堂々とキレてみせた喜美子だから、それによって耕二との関係はきれいに清算されたものと思っていたら、この関係にもオマケ(?)がついていた。場面は、喜美子が習っていたフラメンコの発表会。ポスターを見た耕二は、何を思ったか花束を持ってその会場へ。ところがその花束を受け取った喜美子は公演終了後、耕二の車を追っかけてきたうで、自分の車を意図的にこれに追突させ、あやうく大変な事故に……。新しい彼女を隣に乗せていた耕二はさすがにこれにはキレたが、そこで喜美子が言うセリフがにくい。それは、「あの時は私だけがキレたので、今度はキレたあなたを見たかったの」というもの……。し

かしこまでやるのは、いくら何でもちょっとしつこすぎるのでは……？

## 納得いかない展開その4——ハッピーエンド

約2時間のこの映画には、いろいろなストーリーがいっぱいつまっている。というよりちょっと詰め込みすぎで食傷ざみというべきだが、最後の舞台は花の都パリ。傷心(?)の透はパリの芸術学校(?)でいつも1人の女性の絵を描いているというロマンティックな設定だ。そしてそこを1人で訪ねてきたのは、もちろん詩史。2人が東京タワーならぬエッフェル塔をバックに再び抱きあい、将来を誓い合って映画はジ・エンド。こんなハッピーエンドってあり……？ 私には全然納得できないが……？

## 興味深い観客層

以上、この映画についての私の評論はかなり厳しいもの。特に若い2人のハンサムな男性に対して厳しいものがあるが、それには、ひょっとして私のひがみ目が入っているかも……？ 他方、この映画での黒木瞳はやはりステキ！ 1960年生まれの彼女の実年齢は44歳だが、スクリーン上ではとてもそんなに見えない。『化身』(86年)でデビューした時の黒木瞳はホントにきれいで、この映画でのヌードシーンは私は今でもハッキリ覚えている。また、『失楽園』(97年)や『SADA』(98年)もホントによかった。このように黒木瞳に甘いのは、所詮スケベ親父が書く映画評論だから……？

この『東京タワー』を観た東宝試写室は、いつもとはかなり異なり、若い女性客がいっぱいだった。彼女たちの狙いは私と正反対に、若くてハンサムそしてカッコよく年上の人妻と恋愛関係を楽しむ岡田准一くんや松本潤くんにあるのだろう。たしかに2人ともカッコいいことは認めるが、私に言わせればすべてにおいて「実力不足」で「10年早いワ！」ということだが、若い女性たちは、きっとそうは思わないだろう。そしてまた、そのお相手が黒木瞳だけに、女性客たちもあまり違和感なくこれを認め、1つのロマンティックな不倫物語を観客として楽しく(?)見つめ、納得できるのかもしれない。もちろん自分が当事者となったと考えれば、その大変さは言うまでもないが……？ 2004(平成16)年11月19日記